

Title	カフカの『城』：測量師Kの闘い
Sub Title	The struggle of 'Landvermesser K' in Kafka's Schloss
Author	黒岩, 純一 (Kuroiwa, Junichi)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1968
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.26, (1968. 11) ,p.30- 45
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00260001-0030

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

カフカの『城』

——測量師Kの闘い——

黒 岩 純 一

カフカは『アメリカ』、『訴訟』、『城』という三編の長編小説を残したが、この三編目の小説を解釈するのが最も難かしい。これも難解といわれる『訴訟』の主人公ヨーゼフ・Kについては性格も、素姓も述べられていたし、訴訟の内容も法廷の性格も描写されていた。しかし『城』の主人公である測量師Kは幻のような存在で、彼が如何なる人間であるかは説明がない。それは城の本質、機能にいても言えることである。

考えてみるとカフカほど評価と解釈が分かれる作家もめずらしい。伝記的解釈、宗教的解釈、実存主義的解釈、社会批判的（とりわけマルクス主義的）解釈、文学学ないし文学史的解釈等々まさに多種多様である。これはカフカの作品そのものが多義的で多くの対立的解釈を可能にしているからだとも言える。しかしその多くはそれぞれの立場にこだわって、カフカの一面だけを強調する結果、相互の議論がかみ合わないまま解釈しきれないものを残している。そこで本稿では一定の解釈のみに頼って独断に陥るような危険を避けるため、諸家の解釈を引用しながら比較するというかたちをとった。結果としてカフカの意図したものの全貌があらわれてくれれば、目

的は達せられたと言える。

一 城⁽¹⁾

この作品のもつ問題点や雰囲気をもよくあらわしているのは測量師Kのこの村への到着を叙する第一章である。Kは城から測量師として招聘されたと主張するが、村では測量師を必要としないと断わられる。村は城の絶対的支配下にあり、測量師と名のこの男に対して村人の態度は冷たい。村の街道は城に近づきはするが到達できない道である。こうした事情を城の高級官吏クラムに直接訴えんとするがその接触も絶たれている。こんな絶望的状况からKの斗いははじまる。城に達し、城を相手に斗うことが彼の目標で、それがまた彼に力を与える。

従って解釈の際の主たる問は、Kが城の中に何を欲し、なぜ城に入らんとする努力が失敗に帰するのか、そしてどこに城の本質と機能があるのか、ということである。

エムリッヒは次のように述べている。「Kの斗いは自由と結合の間の斗いである。彼は自由な自我を主張する反面で、測量するべき土地と宿泊の場を求めている——これは結合によってのみ可能である。Kは支配を行なう城の中の役所に対し自由と結合の欲求を抱きながら対決するが、彼はそのいずれも保持していない。そこにはただ *Entweder-Oder* (二者択一)⁽²⁾ が存在するだけである。自我は結局役所の「外部」にある。解決不能の敵対からはただ死のみが救済する。以上がエムリッヒ説の要約であるが、彼には多数の支持者があるのをこれを中心に考察したい。まず城の姿をみてみよう。城の外面は惨めで荒廃を感じさせるが、内部には淫蕩が渦巻き、わけのわからぬ衝動の力が感じられる。城の役人は村人に対して超越的地位を保ち、つねに村人に犠牲を強いる。城は権力とエロティックの両面に彩られている。ヴァルター・ゾーケルや東独のエルンスト・フィッシャーはこうした城の役人の中にオーストリアの官僚主義の腐敗した姿をみている。⁽³⁾ゾーケルはオーストリア貴族とオーストリア官僚主義の提携がベーメンの農業地帯を支配していたが、その残

淳をカフカもチューラウ（一九一七年秋から、カフカは妹オトラが農場を管理するこの地に一年ほど滞在した）で経験しただろう、と述べている。

Kは村に到着した夜、測量師であると名のる。城の執事の息子シュヴァルツァーの問い合わせに対して中央事務局は一旦それを否定したあと「城はたしかに測量師を任命した」（13）、と電話で伝えてくる。「Kはじっと耳を傾けていた。では城は彼を測量師に任命したのだ」（13）という文章がそのあとに続いている。雀踊りしてよろこぶかと思うと、逆にKは城の危険で巧妙な駆け引きを推測する。こうしてみると城から測量師として招聘されたと主張するKの言葉も疑わしくなってくる。それは城の近くにとどまるための口実ではなかったのか？ Kが任命されたのではなく自由意志で村へ来たのだとすると彼の村での積極的な努力もうなづける。自称測量師は宿泊の場と仕事、更に城との接触を同時に得んとする。その際に抵抗があるだろうことはKも承知していて、「名譽と平和のうちに生活を送ろうなんて考えてもみない」（208）。彼は測量師として承認を受けた後も城の役所との直接的な接触を求める。こうしてみると彼が敢て測量せんとするものは彼の隣人のほんの僅かな土地ではなくて、城そのものらしい。しかし到るところで彼は挫折を経験する。測量師として承認された後もKには仕事が与えられない。Kが村へ足をふみ入れたときに思い出した少年時代のエピソード。「高い墓地の塀の上で経験した勝利感、それは彼の長い人生の支えであった」（44）。彼は故郷に妻子を残してきたというが、彼の過去については読者は何も知らされない。（エムリッヒやヘルムート・リヒターが指摘するようにKに妻子があったというのも疑わしい。後に彼は何ら躊躇することなくフリーダを愛人に行っている。）しかしKの対人関係をみると彼の生活史がうかがえる。村の家族から親切に扱われると彼は本能的に避けようとする。「彼を追い払ったり、彼に不安を抱いている人間の方が危険が少ないと感じているらしい。彼等は力を結集する助けをしてくれるが、彼に助力し親切にしてくれる人間は彼の力を破壊してしまうからだ。」（47）ゲルステッカーが彼に就職口を世話しようとするのと彼は言う。「親切は有難いけど、だからばくはあんたのところへは行かないんだよ」（496）。ここには絶望のうちに挫折を繰返して来た男の姿がある。（しかし好意を本能的に避けるというよりKが城との直接的な結びつきを狙っているからこの申し出を拒否するのだという解釈も成り立つ。）城との結びつきを得んとするKの努力、これがKと村人とを区別している。日常

の内容のないメカニズムに埋没する危険から救ってくれる唯一のものがこの努力である。城において彼が何をしようとしているのか、その点については作品の中ではどこにも述べられていない。Kは労働者になるうと思えば、いつでもなれる。しかしKは労働者であることの危険を承知している。それはこの作品の核心に触れる問題であるが、労働者となって仕事に注意力を奪われることはその分だけ私的な生活が曇らされて展望を失うことになる。

「公務と生活とがここほど錯綜している場所をKは他に知らなかった。公務と生活が互にその場を交換し合っているように思えた」(81)。彼が承認を求めて斗おうとする役所の性格、彼の斗いの目標はこれで解説できる。Kは村の中に確実な基礎の上に根ざした全き価値ある存在、公的生活と私的生活の統一——即ち職業共同体と私的生活との統一を求めているのである。(この点でエムリッヒとヘルムート・リヒターは同一見解に立っている⁽⁴⁾)。それ故労働者になることに彼は満足できない。それ自体の中に間違った人間生活の危険を宿しているからである。というのもカフカの初期の主人公たちの運命が示しているように日常があらゆる注意力を要求し、人間的な欲求や義務を下位におくよう要求するからである。従って城はカフカのご概念によると職業生活だけでなく、人間の私的生活をも規制し監視する生活の普遍的な管理組織である。Kはこの法廷を永い間さがし求めていた。彼は故郷喪失者としてこの決定的な場で彼の生活に秩序を与え、それに応じた方法で今後の生活を続けて行くために、すべてを意のままにしたいという衝動を感じる。

Kの斗いの目標をエムリッヒは城に Selbst (自我)⁽⁵⁾ を承認させることであると述べている。これに対しリヒターは、カフカの比喩を Selbst (自我) や Sein (存在) に発展させてしまうエムリッヒには過剰解説の傾向があると批判する⁽⁶⁾。(ちなみにエムリッヒは『城』の研究に『Der menschliche Kosmos』という表題をつけている⁽⁷⁾)。ところでそのリヒターは別の個所でKの斗いは Persönlichkeit (人格)⁽⁷⁾ を求める斗いであると述べている。ほかにはゾーケルが Subjektivität (主体性)⁽⁸⁾ 説を、ハインツ・ポリツァーは Ich (自我) 説⁽⁹⁾、フリッツ・マルティニは Existenz (実存)⁽¹⁰⁾ 説をそれぞれとっている。

『城』の構想はカフカの確信に従って、個人が諸々の未知の力に完全に支配され、その手中に完全に陥っているということを示している。個人にとって自分の運命を自分で決定する可能性はない。この諸々の力の本質はカフカにもわからない。結局Kは最初から意識

ある生活の不可能性を確信しているのである。彼は斗うために来る。斗わなければならぬという彼の感情の中にカファカの唯一のプロトストがある。Kの周囲に支配している倦怠の中にKが沈みこむ危険から守ってくれているものはこうした積極性なのである。次にしばしば問題となるマクス・プロートによる『城』の解釈を挙げてみる。

プロートは初版後記に「この『城』はまさしく神学者たちのいうところの恩寵であり、人間の運命の(村の)神意による管理である……」(48)と書いている。ノーベルト・フェルストはプロートの仮説を支持して、城と村から成る共同体を「神の国」であるとしている。最近ではクルト・ヴァインベルクが「城」II「天国」であるとの見解をとっている。⁽¹²⁾

これに対しエーリッヒ・ヘラーは「城にはこれを是認するような神性の概念はない」⁽¹³⁾と述べて更に具体的に、「城の役人達ははつきりとした悪意を抱いている者は勿論別として、善悪に対して完全に無関心であり、愛や恩寵、憐憫、偉大さの痕跡も認められない、彼らの冷たいよそよそしさは畏敬よりもむしろ不安と嫌悪を惹き起す……飽くことのない欲望に支配された連中であり……彼らの破廉恥は限りもない……城は神意による支配を行なうのでもなく、上天を表わしているのでもない」⁽¹⁴⁾と述べている。しかしそのヘラーも最終的な「城」の秘密に関しては近づくことを避けている。ヘラーのほかにもエムリッヒ、ポリツァー、ヘルマン・ポングス、ヴァルター・ムシユク等が宗教的解釈を批判している。理由もほぼヘラーと同じである。Kにとって城はやはり自分自身の絶対的目標の主観的に描かれた対象ではなからうか。

二 村

城と村、役人と農民の間にははっきりとした懸隔がみられる。ただ村の秘書と使者だけが城と村とを結びつけている。城に到達し、役人と個人的な対話を求めるKの努力は村人の頭を横に振らせるだけで、彼らにますます不信の念を抱かせる。ただKの恋人フリーダと役人ゾルティニーのみだらな求愛を拒絶したアマリアの家族だけは彼の意図に従える範囲内で彼に協力している。

フリーダに対するKの關係には中世以來ヨーロッパ文學を支配してきた浪漫的な愛はもはやみられない。愛のもつ一回性は失われてしまっている。Kはフリーダを成程愛しはするが、それはクラム故の愛である。フリーダはクラムの愛人である。Kの恋は役人クラムに接近するための手段である。すべての人間關係をKは斗いに役立つかどうかというアスペクトのもとに眺める。城に接近する手がかりを靴屋に見出したKが医術の心得があるといつて靴屋の息子ハンスに取り入ろうとする態度も手段としての人間關係である。フリーダを獲得したKはクラムとの斗いを有利に進める抵当を得る。フリーダは自分が利用されたことを知ってKをなじるが、Kは罪の意識もなしに答える。「きみの以前の生活がすべて深く忘却の淵に落ちこんでしまつて前進するために苦闘しなければならない」とを君はもう忘れてしまつていてのではないかね。どうにか見込みがあることはすべてできるだけ利用しなければならぬのではないかね?」(214)

Kとフリーダの最初の抱擁が酒場のビールの水溜りや、床をおおう其他の汚物の中で行われたことは二人の恋のもつ意味を象徴している。カフカの描く恋の場面がしばしば汚穢におおわれていることは注目に値する。手段としての恋を最もよく説明してくれるのは村の秘書モームスの調書の断片に残されていたというスケッチである。(『初版後記』、この箇所はカフカによつて削除された)。「一人の男が娘を抱いている、娘の顔はこの男の胸にうずめられている。背の高い男は娘の肩ごしに一枚の紙に見入り、うれしそうに何か金額のようなものを書き込んでいる。」(488)

カフカがなぜこの箇所を削除したのか、明らかではないが、ある程度参考にはなるだろう。

ところでKがフリーダに出合つた頃、城の使者バルナバスがKの前へあらわれて自分の家へ案内する。Kはバルナバスやその姉妹に親しみを覚える。(ゾーケルはバルナバス純粋な自我と⁽¹⁵⁾解釈している。とするとバルナバスに対するKの親近感も理解できる。)バルナバスの家族はアマリアが役人ゾルティニーのみだらな要求を拒絶したため村八分的な扱いを受けている。しかしそれは城からの指図によるものではない。村人は城に対する単なる不安の念、つまり罪の意識の負い目から逃れんがためにこの一家に背を向けるのである。バルナバスはKに救いと自由を期待して家へ案内した。Kはこの家族に自分と似た境涯をみる。長姉オルガは酒場へ出入りする城

の下級官吏相手に娼婦の生活をしながら城の情報を得んとする。バルナバスを城の使者にしたのも城との接触を保ちながら、いつかこの悲惨な状況から解放されたいという一家の願いがあるからである。城の使者バルナバスを通じて城との結びつきを得んと願うKはここで自己認識のよびかけを感じる。結局城の使者であるバルナバスはKを城へではなく、K自身へと導く。前述したようにゾーケルはこのバルナバスにKの分身をみている。バルナバスの家族が村八分にされている主たる原因はアマーリアがゾルティニーの要求を拒絶したからであるが、姉オルガや靴屋のブルンスヴィックが証言するようにアマーリアはゾルティニーを愛していたから、その破廉恥な要求をうけた時、アマーリアにとってそれだけ一層世界は虚に変わってしまった。それは単に個人的な愛の幻滅ではない。それは単に彼女の世界が崩壊することではなく世界そのものの崩壊であった。彼女は「悩みをにんじているだけでなく、その悩みを洞察する頭をもっている。彼女は真実と正面きって向い合って立ち、生き抜く」(278) ような女性である。アマーリアは城の奈落の秘密をみた。そして城について知っていた一切をゾルティニーにおいて確認したのであった。かくて彼女は村に生活しながら、城の支配力の外に立つ。絶望の渦に巻きこまれながら眼は絶望の彼方を見ている。ポリツァーはこの孤独な女性像の中にカフカ以後(そしてある程度カフカゆえに)知られるようになった実存的孤独をみている。役人の愛人であることに最大の名誉を覚える女達、彼女らの間ではそれがノーマルで自然である。だがアマーリアは「純粋さ」を守った。それは「断食芸人」の「純粋さ」を想起させる。つまりゾーケルのいう自我の絶対主義⁽¹⁸⁾である。

測量師とアマーリアの親近性は明瞭である。Kが子供時代に墓地の高い塀の上で体験した「誇らしさ」もアマーリアの「高慢」の Variante (変形) である。Kとアマーリアの更に密接な関係はゾルティニーとゾルティニーという二人の役人の名にみる事ができる。ゾルティニーはアマーリアの家族の追放の直接の動機になった人物であり、ゾルティニーはKの測量師としての仕事の任命のために奔走した人物である。両者の名前のおどろくべき類似から「招聘の承認」と「追放」との結びつきが認識される。これはいずれもKとアマーリアに対する権力者の目に見えない攻撃である。Kが招聘をうけて役人の一人として城という共同体の中に組み込まれてしまふことは城の力に敗北することであり、逆にアマーリアのように追放されては闘いを続けることが不可能になる。

ハインツ・ポリツァーはゾルテ、イーニとゾルデ、イーニの名前の類似を全く別様に解釈している。彼はカフカにおいて、音楽がつねに超感覚的なものの象徴であること、そしてそれが城の迷路的役割と並んで、Kを混乱させる効果をもっていると指摘したあと、同音異義ともいふべき作中人物の名前を挙げる。靴屋ブルンスヴィックの娘はKの恋人フリーダと同名、またその女の子の兄ハンスは橋畔亭の主人と同名等。更にまた紳士荘と橋畔亭の女主人を名前でよばず、ただ「女主人」とよぶために生ずる混乱、これはすべてKを城に接近させないための、あるいは間違つた方向に導くための、いわば誤導の手段であると説明する。⁽¹⁹⁾以上二つの全く異なつた見解から一つの解釈が生まれる。つまり、城はKを共同体の中に導きこんで斗いの目標を見失わせるか、あるいは接近を許さずにその努力を挫折させるかの二重の攻撃をしかけてきているように思われる。

オルガとアマーリアの二人は測量師Kの斗いの両極を代表している。つまり、無限に自己を苦しめる捨身の斗いと、役人に対する妥協のない批判精神とである。だが結局アマーリアもフリーダもKを城へ導くことはできなかった。Kはアマーリアの真理を洞察する眼を学ばねばならなかつたし、アマーリアはKの多面的な斗いの経験を学んで生きる力を獲得しなければならなかつたのだが、遂に実現しなかつた。エムリツヒはポリツァーやポングスのようにアマーリアを模範とか理想の姿とは考えない。アマーリアが正しく、Kが正しくないとか、という問題ではなく、Kの斗いの経験とアマーリアの孤独から生じた洞察力とは相補的に結びつかなければならなかつたのだと解釈する。⁽²⁰⁾

Kは城の承認や許可がなくとも村の中で生活することができるのだということをアマーリアの姿から理解しなければならなかつたのだがKにはその洞察が欠けていた。

フリーダもまたKを城へ導く力とはなり得ずやがてKのもとを去つた。これには二つの原因が考えられる。フリーダにはもともとクラムの支配を脱して自由にならうとする欲求があつた。それが彼女をKと結びつける原因となつていた。しかしフリーダが求めたものはKと二人きりの愛の巢であつた。彼女はそのためならこの村を棄て他国へ行つてもよいと考えている。しかしKにとっては家庭の幸福の中に埋没してしまうことは斗いをみづから放棄することである。KはそれをおそれるのだがフリーダにはKの心が理解できない。

もともとKとの結びつきが衝動的であっただけに、「彼女はまだクラムの支配から完全に脱していたとは言いがたい。」(188)これが一つの理由、次に考えられるのがフリーダのオルガに対する嫉妬である。フリーダは娼婦であるオルガを軽蔑しているがKはバルナバス家に足繁く出入りしてはオルガとも親しく付き合っている。プロートはフリーダの示す奇妙な嫉妬をカフカの婚約者ユーリエ・ヴォホリゼクに対するミレナの嫉妬の反映とみている。カフカがユーリエとの婚約を解消したのはミレナの強引な要求があったからだともい(21)う。(エムリッヒはフリーダがKを棄てた理由として、Kの助手虐待に対する反感とフリーダのオルガに対する嫉妬を挙げている。)(22)こうしてフリーダはKから去っていった。

かくて計画は次々に挫折してゆきKも否応なしに自己反省を強いられるようになる。

Kについては度々〈der Unwissende〉(404)とか〈er hat kein Wissen〉(412)ということが言われる。Kも自分で自分を unwissend(79)であると認めている。あるいは、「たよりない子供のようだ」(325・414)と言われることもある。

ポリツァーはこの観点にたつてKを観察し、Kの眼差しがつねに物や人間の外面の間を往き来しており表面の測量に終わっていると指摘する。そしてその例としてKの衣服によせる関心を挙げている。しかし更に深刻なKの反省の姿には決して「無知」とか「子供っぽい」とかいう言葉では片付けられないものがある。Kは城へ入るためにクラムと会って話し合うことを最大の使命と心得ているが、悪かれたような生活態度からはその実現がおぼつかないこと、日頃の生活の中に謙遜とユーモアが必要であることを体験から学んでいた。彼は女中ペービに向つて次のように助言する。

「どれも似たような地位なんだよ。ところがきみにとってはこれが天国なんだ。だから君は何もかも熱心にやりすぎてしまう……きみが考えてみて頼りになれそうな人がいるとその人たちの心をとらえるために、あまり親切にしすぎるもんだから、かえってその人たちの迷惑になってしまつて相手を突き放すような結果になってしまふんだ。」(405)そして更にそのあと次のように言う。「……ただ自分ときみを較べてみると、そんな考えが浮んでくるんだよ……わたし達は二人ともあまりにも騒々しくあまりにも子供っぽく、あまりにもきこちなく努力しただけ……そして永久に何ひとつ手にはいらない……」(407)

エーリッヒ・ヘラーは女中ペービの中にK自身の無益な努力のかりかチャをみて⁽²⁴⁾いる。ペービに対するこの助言は前述したような〈unwissendへな男には決してできることではない、おどろくべき洞察力である。しかしそれも遅すぎた。この洞察は城の役人ビュルゲルとの出会いにおいて悲しい比喩を見出していた。

三 ビュルゲル・エピソード

フリーダがKのもとを去った夜、クラムの第一秘書エアランガーからKに会いたいという連絡がくる。しかしエアランガーの部屋をさがす積りが疲労のあまり間違つてKはビュルゲルの部屋へ入ってしまう。ビュルゲルは城の秘書と村の秘書とのいわば連絡係である。彼はクラムの直接の部下ではなく、フリードリヒの部下である。フリードリヒについては多くは語られていないが城の中に大きな権限も持たず、威光もないらしい。このFriedrichはKの恋人のFriedaという名と共に皮肉な意味で言われたFrieden(平和)を暗示している。ビュルゲル(Burgel)と⁽²⁵⁾いう名前はBurg(城)の縮小形であるが、これはビュルゲルが城と密接に関係しているとも受けとれるが、縮小形であることは彼の人間としてのつまらなさを意味しているとも考えられる。Burgelはその他にもエーリッヒ・ヘラーが解釈しているように救助をbringen(保証する)小役人の名前とも思⁽²⁶⁾える。

Kとビュルゲルとの出会いは注目に値する。何故ならここで城の役所とKの個人的な話し合いの可能性が分析されているからである。役人と私人との間の矛盾は如何に解消させ得るだろうか？

ビュルゲルは測量師たるKが測量に従事していないことに驚き、この件を調査してみると約束する。しかしこの申し出にKはいささかも心を動かされる様子がない。疲れているためか、それともこれを大言壮語するディレットタンティズムくらいに考えたのか？

しかしKを迎えたビュルゲルは恍惚として喋りまくる。「大抵の村での審問を夜おこなわなければならないので秘書たちは絶えずこぼしています……疲れるからというのではなく、審議の公的な性格を完全に保持することが、夜になると難しくなるからです。いや、

ほとんど不可能です。夜だと、思わず知らずものごとをより個人的な視点から判断してしまうからです。」(344)

秘書たちは役人と私人の間の役の交換を恐れている。ここでエムリッヒは「**私人**」と「**私人**」の関係を指摘する。⁽²⁷⁾ その解釈はフロイトの「**夢の心理学**」に近づいている。つまり日常生活の圧迫のなくなる夜、人間の内部から起ってくる憧れやひそかな悩みや心配事、そこには私人としての人間の姿があらわれる。役人が**私人**としての職務についているとき、彼らは超人的な力そのものであって、人間の自由な自我に触れることはない。しかし公務を離れた人間であれば、それが高級官吏**クラム**であっても人間的な関係を持つことができるのではなからうか。**クラム**の力に対して**K**も自己の自由を主張することができるのではなからうか。更にこの力を超えてより高い人間存在の段階に達し得るのではなからうか。

かつて一度だけ**K**は**クラム**の手紙を受け取ったことがある。その中で**クラム**は**K**の仕事を激励し**K**の仕事に満足していること、そしてその中断は**クラム**を怒らせるだろう、と伝える。測量の仕事を与えられていない**K**にはこれは**クラム**の誤解としか考えられない。だがこの時の手紙は**クラム**の「**私人**」としての発言ではなかったのだらうか。純粹に精神的な発言は「**私人**」対「**私人**」の関係内で行われなければならない。

ところで夜は**私人**が**私人**に戻るべきなのだろう。カフカの他の作品をみても夜は人間が直接に自己の存在の全体と対決させられる領域である(『**変身**』、『**村医者**』参照)。偶然ではあるが**K**が役人**ビュルゲル**の部屋へ入りこんだのも夜である。**K**が自分の願望を実現するための前提条件はそろっている。しかし連日の疲労で**K**は半睡状態で**ビュルゲル**の話の聞いている。

「厄介な意識は消えてゆく。彼は自由になったように感じた……彼はまだ眠りの深みには陥っていなかった、がすでにその中に浸り込んでいた。もう彼からこの眠りを奪うことは誰にもできない。彼にはそのことが大きな勝利を得たように思われた。……裸のギリシヤの神様に似た一人の秘書が**K**にはげしく攻めたてられていた。ひどく滑稽な図だった、斗いは永くは続かなかった。一步一步**K**は大股で前進した。そもそもこれが斗いだらうか？ 本気の抵抗など一つもなかった。」(348)

しかし自由は無意識の上でのみ成立する。眠りと覚醒との中間状態、それを**K**は最後まで持続させることができない。**ビュルゲル**の

話はその間も続いていたが、彼は最後に言う。「陳情者は恐らく何かもうどうでもいい偶然の理由から——疲れ果てて、絶望し、そして過労と失望のために無思慮、無関心になって——彼が行こうと思っていたのとは別の部屋へ飛び込んだんです……いったいその男を捨ておくわけにはいかないものではないでしょうか？ いや、それはできないことです。われわれは幸福な人間の饒舌でその男にすべてを説明してやらざるを得ないので……。測量師さん、陳情者はその気になれば、万事を意のままにすることができんです。そしてそのためにどこかえ嘆願を持ち出せばいいんです。こちらにはその嘆願を叶えてやる用意ができています……」(355)

しかしその時はすでにKは完全に眠りに落ち込んでいた。Kが切望した役人との「私人」対「私人」の対決の機会は失われてしまった。ビュルゲルの長い独白は何を意味していたのか。そこには「私人」を求める心が宿っていた。ビュルゲルとKとは互に解きたい相互関係にある。公人ビュルゲルと私人Kという二人の結びつきから何かが生れてこなければならなかった。だが二人の結びつく機会はついに失われてしまった。絶え間なくクラムを追ってきたKであったが彼の求めていた最も重要な時点で過労に敗れてしまった。「肉体の力には限界がある。これは誰の責任でもない」(356)、とビュルゲルは考える。

このKの挫折は人間の有限的性質に根ざしているのだろう。必然的に避けがたい。従ってカフカはKのビュルゲルとの出会いを悲劇的邂逅という形以外の形では描くことはできなかったし、許されもしなかった。

この作品をプロットはフランス・カフカの『ファウスト』と名づけている。努力をみずからに課せられた義務と感じている点では両者共通しているが超人としてのファウストにはあらかじめ示された道があった。それをファウストは自分自身の責任と精神の自由において進んで行く。しかしKは他国者という関係で「城」に結びついているため、彼の努力は結果的にいつも自分に対する強迫となって戻ってくる。彼は状況をみづから創ったり、選択したりすることはできないからである。

なお、この作品は二十章までで未完に終わっているが、カフカがプロットに語ったという結末は、次のようであったという。「測量師は疲労困憊して死んでしまう。ちょうどその時、城から、正式に村に居住しようとするKの主張は通らないが、或る種の付随的事情を顧慮して、この村で生活し働くことを許可する、という通知がとどく。」(481)

城に対する自己の自由を主張し続けたKが城の許可のもとに村に住むことで満足するのか、城へ入らんとする目標はどうなるのか、あるいはまたすでに学校の小使として働いているKに生活と仕事の自由を与えるというのは如何なる意味かなど次々に疑問が生じてくる。その肝心な点について、作品の中では何ら触れられていない。未完でもあり読者には決定できない。

ポリツァーは『城』がKの村到着の晩を含めて七日間のうちに構成されているところからカフカには創造の七日間をパロディー風に描こうとする意図があったのではないかと述べている。⁽²⁸⁾ 彼によると「城」はさかさまの宇宙進化論、つまり神の手になる作品の撤回である。創造者が七日目に完成した創造物を満足して眺めているのは逆にカフカは彼の「城」の世界を七日目に無の中へ沈めてしまふ、と説明する。

最後にクルト・ヴァインベルクの解釈を要約しておこう。マクス・ブロート、ノーベルト・フルストなどの宗教的解釈が批判を受けて以来の数少ない宗教的解釈の一つである。ヴァインベルクは『城』の原型を旧約聖書の中に見出している。カイン (Kain) の血筋をひくKはアベルに変身して彼の不安な流浪の生活に終止符を打ちたいと考えている。土地を測量する、つまり土地のすみからすみへと歩きまわる、定住するところのない、つかの間の生活を脱け出して *das himmlische Jerusalem* (天国) である城の中へ入ることを目標にしている。城の記述もソロモンの神殿とかなり一致する部分がある。しかし結局カインのアベルへの変身が成功したかどうかという問には小説『城』は黙して語らない、⁽³⁰⁾ という。

「」内の文章はテキストからの引用であり、() の数字はその頁数を示す。テキストはフィッシャー版を使用した。

註1 マクス・ブロートの日記によるとカフカがこの作品の冒頭部分を一九二二年三月十五日に朗読したという。執筆の開始は一九二二年暮から二十二年にかけてであろう。類似の構想はすでに一九一四年六月十一日の『日記』の中にある『村の誘惑』や一九一七年七月二十九日の『日記』の王様の話にみられる。

一九二二年「労働者災害保険局」の職を辞したカフカは終身恩給を得て、二度と職につくことはなかった。人間嫌いになり Milena Jesenská

との愛の挫折に深く傷ついていた。Milena とは一九二〇年四月、カフカが Meran への旅行中最初の手紙を書いて以来通信があった。カフカの作品のチェク語への翻訳者であるが、カフカは『火夫』、『父への手紙』一九二一年十月には『日記』を全部彼女に渡している。彼女はチェク人であり、ユダヤ人ではない。カフカより十二才年下で文筆家 Ernst Polak と結婚しておりウィーンに住んでいた。この恋愛事件は『城』にさまざまな影響を与えている。Milena が暴君の夫から離れられなかったように、K が愛した Frieda は城の役人 Klamm から離れられなかった。Milena の夫の姿が Klamm に反映されていることはしばしば指摘されることである。殊に女性関係が多かったという。Herrenhof は作中の旅館の名であるが同名の Café がウィーンにあり、Ernst Polak 等はその常連であり、通称 Herrenhof (娼婦館) とよばれていた。

ところで『城』を書く前に二つの事件があった。一、Babicka (Großmutter) という小説を読んだこと。これはチェクの女流作家 Božena Němcová が一八五五年に著した自伝的作品であるが、この中で村人に尊敬される城が重要な役を演ずる。この小説をカフカは田舎医者の叔父 Siegfried の家で妹達に朗読してきかせている。しかし城のモチーフ以外類似性はなく、二、Josef Latzner の Menchunied、この芝居をカフカは一九二一年プラハで観て長い報告を『日記』に記している。この作品の中に、似た姿をしていつも一緒にあらわれる二人の人物が登場するがこの二人は測量師の二人の助手によく似た面をもっている。

カフカの祖父や父が住んだ Wogek の村は『城』の中の描写にあらわれる。Wogek の城の塔は描写のそれとは合致しない点もある。しかし大体において同一である。城の所有者は Eduard Ritter von Doubek とし十九世紀になってから貴族となった人物である。この場合も女性関係が多かったという。Klaus Wagenbach はその著 F. Kafka Ein Symposion (S. 161 ff.) でカフカの子供時代、少年時代の思い出がしばしば作品解明に利用されることを強調している。その箇所を要約してみよう。

「子供時代、少年時代の思い出はカフカにあってはいつも例とも証明ともなって作品解明に利用される。殊に『城』執筆の直前には何度も手紙や日記の中に自伝的なメモが見つか。Milena 宛の手紙の中には料理女のおともで学校へ通うカフカの姿がある。(Milena (S. 64) しかし最も重要な言葉は『父への手紙』の中にある。これは一九一九年十一月、『城』執筆の二年半前に書かれた作品であるがその中に例えば Hochzeitsvorbereitungen auf dem Lande (S. 204, 191) 七才の時父親と共に祖父の葬式のため Wogek へ行ったこと、村の百姓の生活は町の子供ではカフカには理解できない面が多かったこと、子供達はプラハの学校の場合とちがってドイツ語は話さず、チェク語を喋る。ユダヤ教、父はこれに対しては敬虔であったが、カフカにはよくわからない、半分空虚であったこと。村人はユダヤ人を注意深く見分けては避けており、城についてはみんな昔話をするが、なかなか見せて貰えない、子供ははいれない、殊にユダヤ人の子供は全く許されない。そしてそこには管理人、執事、秘書、召使がいる。

測量師が到着した晩に村人が示す冷たい、よそよそしい態度、翌日目にする城や村の様子、そこには、カフカの少年時代の思い出の中にある Wogek 村の雰囲気があるのだから。

- 2 Wilhelm Emrich : Franz Kafka, Bonn, 1958 S. 298 ㄹㄴㄱ ㄱㄴㄹ
- 3 Walter H. Sokel : Franz Kafka-Tragik und Ironie, München, 1964 S. 397 ㄹㄴㄱ Sinn und Form, 1962, Viertes Heft ㄱㄴㄹ ㄹㄴㄱ
- 4 Ernst Fischer : Franz Kafka
- 4 Emrich, > Kafka < (ㄹㄴㄱ) S. 307 ㄹㄴㄱ Helmut Richter : Franz Kafka, Werk und Entwurf, Berlin, 1962 S. 261
- 5 Emrich, > Kafka < S. 303
- 6 Helmut Richter, > Franz Kafka < (ㄹㄴㄱ) S. 20
- 7 ㄹㄴㄱ S. 262
- 8 Sokel, > Kafka < (ㄹㄴㄱ) S. 391
- 9 Heinz Politzer : Franz Kafka, Der Künstler, S.342
- 10 Fritz Martini : Das Wagnis der Sprache, Stuttgart, Fünfte Auflage 1964 S. 328
- 11 Norbert Furst : Die offenen Geheimtüren Franz Kafkas, Heidelberg 1956 S. 16 ff.
- 12 Kurt Weinberg : Kafkas Dichtungen, Die Trvesten des Mythos, Bern, München 1963 S. 57
- 13 Erich Heller : Enterber Geist, Berlin 1954 S. 318
- 14 Erich Heller : Studien zur Modernen Literatur, Frankfurt am Main 1963 S. 42 ff.
- 15 Sokel, > Franz Kafka < S. 464
- 16 Franz Kafka : Das Schlog S. Fischer Verlag S. 253 u. 262
- 17 Politzer, > Kafka < S. 387
- 18 Sokel, > Franz Kafka < S. 465
- 19 Politzer, > Franz Kafka < S. 350 f.
- 20 Emrich, > Kafka < S. 371
- 21 Max Brod : Franz Kafka, Eine Biographie S. 268 f.
- 22 Emrich, > Kafka < S. 352 f.
- 23 Politzer, > Franz Kafka < S. 322
- 24 Erich Heller : Studien zur modernen Literatur S. 48
- 25 Politzer ㄹㄴㄱ Meister Eckhart ㄹㄴㄱ castellum ㄹㄴㄱ > bürgeln < ㄹㄴㄱ ㄹㄴㄱ ㄹㄴㄱ ㄹㄴㄱ ㄹㄴㄱ > Meister Eckharts Predigten <

- Hrsg. J. Quint Stuttgart 1938 S. 24
26 Heller: Euerbter Geist S. 309
27 Emrich, > Kafka < S. 375
28 Kafka, > Das Schloß < S. 482
29 Polizer, > Franz Kafka < S. 356
30 Weinberg, > Kafkas Dichtungen < S. 57